

ミラーと文学

入江 識 元

(平成6年11月1日受理)

要 旨

我々はミラーの作品を前にして二つの罠に陥るのを避けねばならない。それは「同一性」と「解釈」である。「同一」は我々の錯覚であり、その所産である「解釈」の罠に我々はよく陥るのである。まずこの点を確認しておく。さて、我々の考えるモラルとは、一般に禁欲主義的なものであって、生に対立する生を理性が作っていることに起因する。ミラーにおけるモラルはスピノザ的であり、「理性」が「身体」を超えることはない。「生」は常に「身体」を超えたところにある。ミラーのニヒリズムはニーチェによるものだが、生の可能性を追求するミラーのニヒリズムは理性により生を抑圧する否定的、反動的なものではなく、反動的ではあるが肯定的なものである。『北回帰線』のタイトルのイメージは「毒」であると一般には考えられているが、ミラーにとってCancerは二義的であって、特にエロスとしてのCancerのイメージを彼が持っていたことに注目しなければならない。

キーワード

同一性批判, 共感, 虚偽, モラル, 身体, 肯定的・反動的力, ニヒリズム

1 序論 — 「同一性」と「解釈」への反駁

ひとりの人間と出会うことはひとつの個性と出会うことではない。個性とは、一見同一に見えるその人間に付けられた符号に過ぎないのだから。^{*1}「同一」という概念が実際に認められるならば、あらゆる事物は二項定理の法則に従い、仕分けされ、ラベルを貼られ、整理され、書棚に並べられるだろう。^{*2}そこには逸脱も余剰も存在しない……。ところが、実際に「同一」を行使するならば、数え切れぬほどの余剰を生産し、書棚に収め切れなかった事物が机に並べられることになる。つまり、我々の眼は欺かれているのである。実は「同

一」は存在しない。事物は、時間と空間の上に並べられた無数の個性の微分化＝モル集合体なのである。とすれば、次のように定義することも可能になるだろう。すなわち、「ひとりの作家(の作品)を知る(読む)」ということはひとつの個性を知ることではない。

もし「解釈」という行為ができるならば、言い換えれば、もし我々がその作家を説明することが可能ならば、我々は、常に／すでにその作家を我が身に取り込んでいるのであり、その作家の「属性」が我々の中に存在している。すなわち、その作家に我々は「同一化」している。しかし、我々の目的は、そういった「同一化」の罠に陥ることではない。

ヘンリー・ミラーなる作家にどのようにして入ってゆくか。彼の作品の中に入り込む戸口はいくつか存在している。だが、我々の目的は、ミラーを解釈するのでも説明するのでもない。我々の唯一成し得るのは「共感」であり「対話」である。ミラーとの「対話」は、表面上は一方から（我々の方から）仕掛けられるかのようである。作品とは、書物とはそういった性質のものだからだ。しかし、我々は実際、ミラーの作品における様々な戸口に立ち、扉をたたき、呼び出しながら、対話し共感するのである。「共感」とは「同一化」ではなく、作家を「他者」と認め、交わる行為である。我々が作家に荷担するのではなく、或いは我々が作家をひきずり込むのでもなく、お互いがお互いを離れることによってのみ成立する行為、それが「共感」である。^{*3}

2

2.1 ミラーは「確立された」作家か

ミラーの作品に初めて触れる読者は、その特異性にとまどいを覚えるかもしれない。特に、内容から入り表現へと至る読者にとってはそうである。「確立された」作家の作品は、内容から入り、それに対応する表現を分析することにより理解される。「分析」とは仕分け作業であり、弁証法的営為により整理される作業である。ヘンリー・ミラーは、アメリカ文学史上において、ある意味では「確立された」作家である。これは学者によって認められた、という意味においてであって、それだけのことに過ぎない。なぜなら、ミラーの作品は、いかなる弁証法的分別によっても分析され得るものではないからである。ミラーが他の「確立された」作家と異なるのは、我々読者が、内容から入るのではなく、言表行為それ自体を捉えることから始めなくてはならない、という点においてである。かつて、D. H. ロレンスにおいてそうであったように、「検閲」とは、内容から入り表現へと至る権

力構造がミラーの作品に対し加えた圧力である。しかし、ミラーの真の評価は、ミラーを「確立された」作家として捉えることをやめ、内容から入ることをやめ、言表それ自体を捉えることによって可能となるのである。

2.2 虚偽的行為としての自伝

私は、私自身が自分はこういう人間だと思っているような人間なのだろうか。それとも、他人が私について考えているようなものなのだろうか。ここで、私には決して知ることができない私自身を前にして、私が書くものは全て告白となる。そして私は自分に関するひとつの伝説を作り出して、その中に自分を閉じ込める。^{*4}

これは『黒い春』のエピグラフにあげられたウナムーノ^{*5}の言葉である。これは自我の分裂の告白、分裂症患者の告白に他ならない。ヘンリー・ミラーの作品は、全て「私」の語りであり自伝である。なぜミラーは「私」に固執するのか。エピグラフはこの疑問を解く戸口のひとつと思われる。コギトにより作られる「我」の、他者の認識を介して作られる「我」とのズレ。これは、自我の一貫性、つまり「同一性」に対する疑問を投げかけているのである。「私が書くものは全て告白となる。そして私は自分に関するひとつの伝説を作り出して、その中に自分を閉じ込める。」彼の作品形式の原点はここにある。彼にとって最も純粋な小説とは自分について書くこと＝自伝であり、自分について虚構を作り上げることなのである。ここで注意したいのは、自伝とは事実の羅列ではなく、虚構（ウソを書くこと）であるという点である。ミラーの友人であり写真家のブラッサイは、彼の事実を歪曲する癖について不満を述べている。

ミラーは事実を平気で歪曲する。このやり口に、最初の頃、私はひどく悩まされた。

ショックを受けもした。被害を蒙ったのは私だけではない。^{*6}

これは写真家の失望である。写真家は、目前で行われていることを写し撮ることを問題とする。つまり「実在」が問題なのである。写真家ブラッサイは、ミラーの事実の歪曲を劇的効果のためだとしている。しかし、ブラッサイのこの予想なり確信が無効であることを前掲のエピグラフは示している。事実を歪曲せず書くなればルポルタージュということになるだろうか。ただし、この命題が有効なのは、執筆行為が事実を歪曲しないという前提においてである。困ったことに、事物は言葉のフィルターを通す際、常に／すでに歪められている（つまり、事物＝言葉は成立しない。「同一性」は成立しない。）し、事物は人間に観察される際、常に／すでに言葉に置き換えられている（人は純粋に「観る」ことはできない）。つまり、ルポルタージュは存在せず、常に／すでにフィクションなのである。とすれば、「私」の語りによる執筆行為＝自伝は、事実を歪める、歪めないに関わらず常に「虚構」ということになるのである。ミラーの文学（というよりは文字表現^{ライティング}）に対する姿勢は常にここにあるのであって、これを考慮しないところには、ミラー文学は真に理解し得ない。

ミラーにとってエクリチュールは、自我の「同一性」から逃走する行為に他ならない。ブラッサイによれば、ミラーはフランス語が下手だった。^{*7} また、「ミラーの先祖はいずれもドイツ人であり、学校へあがるまで彼はドイツ語しか話さなかった。隣り近所はもちろんのこと、彼の住んでいた地区は全てドイツ人であり、ドイツ本国よりずっとドイツ的だった。」^{*8} だが、ミラーは言葉など正確にしゃべれないほうがいいと考える。「言葉なんかなくても、たがいに通じ合えるようになる。」^{*9} つまり、外国語の中でどもること——「同一

性」からの逃走だ。

ミラーにとってエクリチュールとは、芸術とは、虚偽の最大の力である。虚構は事実を隠蔽し、読者の目を眩まし、誘惑しながら、虚偽の力を強化し、モラルと戦い勝ち、そうしているうちに、新たな真理を創り出すのである。

2.3 生の可能性とモラル

「検閲」がミラーの作品に課したのはモラルである。あらゆる猥雑な部分を抜き出してはモラルで切る、これが「検閲」という権力構造のやり方である。そこで、我々が考えなくてはならぬのは、モラルはミラーにとってどんな意味を持つのか、である。

家へ帰ると目をさました妻が、私の帰りが遅いので、すさまじい剣幕で怒り出した。いきおい、口論が始まり、そのうちに私はかっとなって妻を殴りつけてやった。妻は床の上に倒れて、わっと泣き出した。……二階の女が、何事が起こったのかと駆け降りてきた。彼女は日本の着物を着て、髪を長く後ろへ垂らしていた。そして、部屋へ飛び込んでくるなり興奮して私にぴったり体を寄せてきた。二人ともそのつもりはなかったのだが、妙なはずみで艶ごとが始まった。私たちは二人で妻をベットに寝かせ、濡れタオルを額に乗せると、二階の女が妻の上にかぶさるようにして腰を曲げている間に、私は彼女の背後に立って、後ろから差し込んでやった。彼女は妻をなぐさめるようなたわごとを口走りながら、長い間そのままでいた。^{*10}

『南回帰線』における一場面である。このようなエピソードは他にいくつも見つかるが、いずれも彼のモラル観を採す上で参考になる。この場面をモラルで判断するならば、妻が殴りつけられ泣き出し、それを介抱する

といった日常的な場面の中に、場違いに飛び込む性交の場面といったものが焦点となるだろう。通常では理解不能なこの行動に、「検閲」は猥雑の刻印を押す。だが、もう少し深く考察すれば、ここには「意識」と「身体」というスピノザの命題が存在することがわかるだろう。^{*11}倒れてわっと泣き出した妻を、悪かったという思いに駆られ介抱する道徳的「意識」と、それと無関係に性交へと導かれる「身体」。「検閲」の強行するモラルは、「意識」により「情念」を制することができるという、デカルト的倫理観を前提に成り立っている。問題なのは、「意識」や「情念」の鎖列に「身体」という新しいモデルが加わった場合である。モラルに制された「意識」はあくまで「身体」より優位に立たなければならない。ところが、かつてスピノザも繰り返したように、「人は身体が何を成し得るかを知らないのだ。」^{*12}ミラーにおける倫理観（と呼べるものがあるならば）も多分にスピノザ的である。「身体」と「意識」はそれぞれ一方が優位に立つことはない。「身体」も「情念」も「意識」を超えて存在している。

「検閲」の誤謬は、身体＝生を認識に従属させている点にある。そうではなく、生は常に認識を超えたところに存在しているのである。認識は生と対立しあい、生を評価し判断するものであると我々は考えているが、それは、生と対立する生を、認識が作り上げているからである。生は常に理性を超えたところに存在する。とすれば、理性の継続であるところのモラルは、生を押さえることはできないだろう。文学的評価はモラルを超えたところに存在しなくてはならない。思惟を理性から切り離し、生が反動的になることをやめたところに、解放された思惟と生の実現があるのである。

2.4 ミラーとニヒリズム

その割れ目を覗きこむと方程式の記号が見

える。均衡のある世界。零にまで減少し、全く残りのない世界。……早熟にも年少にして幻滅をおぼえた男の空虚な間隙ではなくて、アラビア数字のゼロであり、無限に数学的世界が飛び出してくる記号だ。^{*13}

無から無限大の記号が生じ、際限なく昇る螺旋の下に、口を開けた穴が、のろのろと沈下してゆく。陸と水は数を結合せしめ、肉によって書かれた詩は鋼鉄や花崗岩よりも堅い。大地は無限の夜の中へと未知の創造を目ざして旋回してゆく……。^{*14}

上の2つの引用で読みとれるのは、「無」とそれを産み出す穴（割れ目）の存在である。ミラーにとって「無」は非存在を意味するのではなく、^{*15}「無」という「価値」を意味している。ミラーのニヒリズムは、ニーチェの作品との対話の中で生まれたものであるが（決してニーチェの「影響」を受けたのではない）、^{*16}「無」にいかにして価値を持たせるかを考察することにより、ニヒリズムの種類を特定することが、ニーチェと同様ミラーの問題でもある。

ミラーがなぜ無神論をとるのか。宗教を信仰する者は常に反動的である。なぜなら、宗教においては主人は常に神であり、人間は神になることはないからである。「能動」は主たる神の技であり、「反動」は従属する人間の宿命である。したがって、ニーチェによれば、宗教を信仰する者は「良心の疚しさ」^{やま}「負い目」或いは「禁欲主義」に陥ることになる。^{*17}

ニヒリズムとは本質的には、否定的で反動的な力である。ミラーはこの種のニヒリズムを好まない。彼の望むのは肯定的かつ反動的な力である。能動的な力は肯定する力から切り離されると、反動的になる以外にはすることができない。ところが、反動的な力は否定する力から切り離されれば、「価値の転換」

をすることにより、新たな生を積極的に肯定することができる。否定が生むものは「無^{なし}」であるが、肯定することは「創造」することであり、それができるのは能動的な力ではなく反動的な力、すなわち、無の肯定的評価なのである。これがミラーのニヒリズムである。^{*18}

3 エロスとしてのCancer

これまで述べてきたことの補遺として、ミラーの作家としての前半を形成する2つの小説『北回帰線 (Tropic of Cancer)』と『南回帰線 (Tropic of Capricorn)』、とりわけ前者のタイトルについて考察する。この2つの小説のタイトルが、赤道をはさんだ2つの線であるという直感的な対置は、我々を、その背後に見え隠れする思想的な対置へと促すだろう。

—でもなぜCancerなんて単語を本の題名に使ったんだい？

—作品名を考えあぐねて、ぼくは眠れない夜々を過したものだ。ハラーシュ君、君も知っての通り、占星術やシナの象徴論ではCancerって言葉はきわめて重要なんだ。chancreとかcancerは蟹を意味する。蟹ってやつは斜めに歩き、四方八方へ向きを変え、後退りもする。こんな動物は他にいないよ。このことが、ずいぶん長い間ぼくを幻惑しつづけていたんだ……。〈中略〉

—だからね。あの黄道十二宮^{ゾディアック}の記号は、シナの賢人が詩人にもたらしめたものだとはぼくは思う。だけど、癌を意味するcancerは、文明を徐々に腐敗させるもののシンボルでもあるんだよ。^{*19}

タイトルにあるCancerとCapricornは、それぞれパラノイアとスキゾフレニーを表す。赤道を中心とする上下の対称的な線に、彼は対立する両者を表現したといえる。ところが

前の引用を見るかぎり、ミラーはCancerの語をタイトルに選ぶ際、すでに2つの相反する世界を念頭においていたことがうかがえる。すなわち、ひとつは星座や東洋の神秘的世界であり、今ひとつは資本主義におけるパラノイアの癌の世界である。前者はCapicorn的世界であり、後者はCapricornに対立する世界である。

Cancer (かに座、癌) って言葉は、ぼくにとっては、文明の病いや、悪路の絶頂や、道を激変させ、ゼロから再出発する必要性のことなんだ……。そうなんだ、最善か最悪をめざし、まったくの無から再出発する必要がある……。ぼくが望むことは、ぼくの発展を止め、辿った道を逆に戻り、子供の世界に近づき、それを越えることなんだ。^{*20}

Cancerは通常、文明が世界を癌のようにむさぼり喰う「毒」のイメージで捉えられるが、ミラーは癌としてのCancerのイメージを、必ずしも悪くしていなかったことが、この引用からわかる。また、こういった例もある。『北回帰線』は1934年の9月下旬に刊行されるが、その表紙にある絵は、巨大な蟹が女の裸体を喰うものであった。このことから、世界をむさぼり喰う「毒」のイメージとしてのCancerが、ミラーの内部で、それと相反するエロチックなイメージに転換されたことが見てとれる。ミラーは明らかにCancerのイメージを二重にだぶらせて捉えていた。あたかも人体から噴出するエロスとタナトスのように。

注

- * 1 「同一」とは「^{シミュラクル}見せかけ」であり、全ては微分化された差異の反復に過ぎない。「わたしたちは、反復を表象＝再現前化の対象として考察するときには、反復を、同一性によって理解しているものであり、またそればかりでなく、否定的な仕方でも説明しているものである。」(ジル・ドゥルーズ『差異と反復』財津理訳、河出書房新社、1992年、pp.423-24.)
- * 2 「二進法の機械が、便利だからという理由だけで存在すると思うのは、まちがっている。「基数2」はもっとも簡単だといわれる。しかし、実は、二進法の機械は権力装置の重要な一部分なのである。」(ドゥルーズ／パルネ『ドゥルーズの思想』田村毅訳、大修館書店、1980年、p.36.)
- * 3 「われわれは組合せの中でしか組み合わせられない。戦うため、そして書くためには共感しかわれわれにはないのだ、とローレンスは言っていた。(中略)水だけで酔払うヘンリー・ミラーの名場面を思い出そう。アルコール、麻薬、狂気なしですますこと、生成変化とはこれだ、より豊かな生のための酔払い＝になること。これが共感であり、組合せだ。」(同上書、pp.84-85.)
- * 4 『黒い春』のテキストには、Miller, Henry, *Black Spring* (Grove Press, Inc., 1963) を使用した。また、引用の訳には『暗い春』吉田健一訳、福武文庫、を一部手を加えて使用させて頂いた。
- * 5 Unamuno y Jugo, Miguel de. (1864.9.29-1936.12.31) スペインの思想家、詩人、小説家、劇作家。
- * 6 ブラッサイ『作家の誕生ヘンリー・ミラー』飯島耕一、釜山健訳、みすず書房、1979年、p.175. なお、ブラッサイ (Brassai) は1899年ルーマニアのブラッサウに生まれる写真家でありジャーナリスト。ミラーの作品にはハラーシュの名で登場するが、ハラーシュ (Gyula Halasz) はブラッサイの本名である。
- * 7 同上書、p.38.
- * 8 同上書、p.14.
- * 9 同上書、p.39.
- * 10 『南回帰線』のテキストには、Miller, Henry, *Tropic of Capricorn*, London, Grafton Books, 1966. を使用した。また、引用の訳には『南回帰線』大久保康雄訳、新潮文庫、を使用させて頂いたが、一部修正を加えてある。なお、この引用箇所は、ブラッサイも前掲書で引用している場面で、*Capricorn*のテキストpp.68-69にある。
- * 11 スピノザにおける「意識」と「身体」の問題についてはドゥルーズの詳しい説明がある。ドゥルーズ／パルネ前掲書、pp.93-97.を参照のこと。
- * 12 ジル・ドゥルーズ『スピノザ—実践の哲学』鈴木雅大訳、平凡社、1994年、p.28.
- * 13 Miller, Henry. *Tropic of Cancer*, London, Grafton Books, 1965, p.249. なお、引用の訳は、『北回帰線』大久保康雄訳、新潮文庫、を一部修正を加えながら使用させて頂いた。
- * 14 *ibid.* p.253.
- * 15 ちなみに、ミラーはNONENTITYという登場人物を『北回帰線』に書いている。テキスト *Cancer* p.85以下を参照のこと。
- * 16 ニーチェについての記述は、ミラーのほぼ全作品に見られる。
- * 17 この辺りのことについては、ニーチェ『道徳の系譜』木場深定訳、岩波文庫、における第二論文p.61以下を参照のこと。

- * 18 この論文における3章の内容と絡めて論ずるならば、否定的かつ反動的な力はパラノイアであり、肯定的かつ反動的な力はスキゾフレニーである。言い換えれば、男に対して否定的反動は「去勢」であり、肯定的反動は「女陰」である。(ドゥルーズ／ガタリ『アンチ・オイディプス』市倉宏祐訳，河出書房新社，1986年，p.333.)
- * 19 ブラッサイ，前掲書，p.149.
- * 20 同上書，p.48.

Miller and His Literature

Nobumoto IRIE

(Received November 1, 1994)

ABSTRACT

We must avoid falling into two philosophical traps when reading Miller. They are “identity” and “translation”. “Identity” comes from our illusion and it creates a trap of translation. We must remember it. “Moral” we recognize is, generally, stoic, which results from the fact that “reason” creates “life” that is opposed to our life. But “moral” which Miller recognizes is Spinozistic. “Reason” cannot be above “body”, but “life” can always/already be above “body”. Miller’s nihilism is based on Nietzsche. Miller pursues potentiality of life and his nihilism is affirmative and reactive, not negative and reactive. Generally, the image of the title *Tropic of Cancer* is “poisonous” “evil”, but the term “Cancer” Miller uses is ambiguous. We must notice the fact that he feels the image of Cancer as “eros”.

KEY WORDS

criticism to “identity”, sympathy, falsehood, moral, body, affirmative and reactive power, nihilism, Cancer